

ロドスのアポロニオス (1)

高橋 通男

1. 332—334

*ἄλλα μὲν ὅσσα τε νηὶ εφοπλίσασθαι ἔοικε,
πάντα γὰρ εὖ κατὰ κόσμον ἐπαρτέα κείται ἰούσι.
τῶ κτλ.*

332 ἄρσαμεν Gerhard

333 γὰρ Ω, δὲ I², μάλ' Huet,

πᾶρ' Schneider, fort. τᾶγ' Vian

このテキストの問題は 333 行の *γὰρ* の位置にある。*γὰρ* の適正な位置は文を構成する語群中の第 2 番目にある。もとより例外はある。このテキストでは *γὰρ* は第 9 番目の位置を占めている。しかも詩行をかえて現われる。ギリシャ語として極めて拙劣である。果してアポロニオスはこのように書いたのか。この *γὰρ* の位置の理解或いは修復作業は E. Gerhard, O. Schneider の時代に始まり、既に 2 世紀が過ぎた。尤も主要な写本全ては *γὰρ* を読みとして提供するが、写本 I より出ているものに *δὲ* という読みがある。*δὲ* と直した写本家が *γὰρ* に疑問をもち、*δὲ* としたと仮定すれば、この問題提起は 15 世紀にまで遡ることになる。孰れにせよ現存する全ての写本の元になっている写本が *γὰρ* を有していたと推定されるから、これが誤写であるとすれば非常に早い時期に起ったと考えられる。

さて、*γὰρ* の位置の例外は多岐に亘る。先ず、*μὲν* を伴うと *μὲν γὰρ* という語順になる(例えば、S. Aj. 746 *ὁ μὲν γὰρ*)。更に、*γὰρ* に先行する語群が互いに密接に連結している場合。例えば、A. Ch. 641 *τὸ μὴ θέμις γὰρ*。古典期の悲劇作品においては、その位置は第 3 番目から第 5 番目までの幅をもって使われる。ここで一つ問題になるのは、S. Ph. 1451 に現われる *γὰρ* の位置である。これは実に第 6 番目の位置を占める：*καιρὸς καὶ πλοῦς / ὄδ' ἐπέιγει γὰρ κατὰ πρύμνην*。このような例は古典期のギリシャ語の例証中唯一である。R. Jebb が指摘したように異常な例としか言いようがない。ソフォクレスの他の *γὰρ* の用例は第 4 番目の位置より後に来ることはない。またこれは古典期のギリシャ語が

γάρ に与える位置の限界でもある。但し、喜劇作家アリストファネスはかなり自由に使用しており、第5番目の位置に置く例を少数提供する(例えば、Lys. 489, Pl. 1189)。これは口語的表現の多い喜劇作品が有する破格と言えないこともない。新喜劇においては第9番目の位置に γάρ が置かれる例が発見されている。Antiph. Fr. 212. 7 αἱ μὲν ἄλλαι τοῦνομα βλέπουσιν τοῖς τρόποις γὰρ ὄντως ὄν καλόν がそれである。これも喜劇作品中に現われる事、古典ギリシャ語の規範が崩壊して行った前4世紀末のものである事を考え合わせると納得せざるを得ない。

初期の叙事詩及び抒情詩においては上に示したような極端な例は無い。γάρ が第3番目に置かれる場合は μὲν が先行する時と、ἀλλὰ~γάρ というパターンで小辞の間に一語を挿入時である。ホメロスにおいて γάρ が第4番目の位置を占めるのは、ἦ τοι μὲν γὰρ (Y67, 313), ἦ τοι μὲν γὰρ (Δ376) という定型句である。第4番目に置かれるもう一つの例は呼びかけが先行する場合である：/ ὦ φίλοι, οὐ γὰρ (κ174), / ὦ Κίρκη, τίς γὰρ (κ383) など。これも定型的表現である。γάρ が最も遅く現われるのは、/ καὶ σύ, φίλος, μάλα γάρ (α301=γ199) という定型句であって、二回だけ使われる。第5番目の位置を占める。ホメロスが γάρ を上例より後の位置に置くことはない。況や次の詩行にまで遅らせることなど皆無である。

さて、アポロニオスの場合はどうか。自明の事であるが、アポロニオスは言語・語法においてホメロスを手本としている。ホメロスの定型句の組合せを変え、ホメロスに現われる稀語を用い、ホメロスが使っていない言葉を導入して叙事詩言語或いは表現の枠を拡げようとする。擬古文でありながらホメロスとは異った独自のスタイルを有する叙事詩を作り上げている。しかしその語法においてホメロスに非常に忠実である。何よりも先ずアポロニオスは当時第一流のホメロス学者であった。アポロニオスのテキストには異読を含めると γάρ の使用例は 203 ある。γάρ が最も遅く出てくる例は、問題の箇所を別とすれば、1.336 / ἀλλά, φίλοι, ξενός γὰρ である。これが唯一の例外と言えるものである。ホメロス以上に γάρ の用法は厳密なのである。以上のことを考慮に入れると、333 行の γὰρ は問題とせざるを得ない。アポロニオスはここに γάρ と書いたのか?これがこのテキストの校訂作業の出発点となる。

E. Gerhard は 332 行の ἀλλὰ μὲν を ἄρσαμεν と考えた。この提案は γὰρ に誤りは無いとするものである。第 332 行を独立の文と考えてみてはどうかという提案である。これは筋が通る。ἀραρίσκειν という動詞が船の装備について使われることは A. R. 2. 1062 及び α280 を例証とするだけで充分であろう。しかしこれには若干の難点がある。ἀλλὰ が消えることによって関係代名詞 ὅσσα の先行詞も消える。この点は先行詞が省略されることが多いから説明がつく。次に、ἀραρίσκειν はこのような文脈では手段の与格を要求する。この点も或る名詞の与格形が了解されていると考えられないことはない。しかし最大の難点

は *ἄλλα* を取り去ることにある。このことについては後で説明する。この *ἄρσαμεν* という提案に可能性は無い。

O. Schneider は 333 行の *γὰρ* を *πάρ'* の誤写であると推定した。これは妙を得た推定と言える。ΠΑΡ と ΓΑΡ は形態上の類似を考えると写し手或いは写し手のために朗読する読み手を惑わす要因を含んでいるからである。しかしこれが不可能であることは容易に証明し得る。O. Schneider が *πάρ'* とした意図は *πάντα* を対格ととり、*πάρ'* に支配させることにある。アナストロペーの位置に置いているからである。直訳すると意味は次のようになる。「船のために装備されるにふさわしい限りの他の物は、全ての物の傍に出発しようとしている者達(即ち、我々)のために順に違って整えられている。」ところで「全ての物」とは何か。漠然としている。意味が通りにくいのである。それでは何故 Schneider は鋭アクセントを取り除いて単純に *παρ'* としなかったのか。その理由も明白である。*παρ'* とすると *κεῖται* と共にトメシスを形成すると考えるか、格 *ιοῦσι* を支配させることになる。実際このほうがどちらにせよ意味がすっきりと通りはるかに優れている。しかし *παρ'* は *κεῖται* 或いは *ιοῦσι* と余りにも離れすぎるのである。しかも両者の間にはカエスラがしっかりと根を下ろしている。従ってこの推定は可能性を持たない。

ところで、E. Gerhard 以外に *γὰρ* を生かそうとする試みが無かったわけではない。A. Wellauer はその校訂本 (Leipzig 1828) において離れ業をやったのけた。 *πάντα γὰρ εὖ κατὰ κόσμον* を挿入文と解したのである。

ἄλλα μὲν ὄσσα τε νηὶ ἐφοπλίσσασθαι ἔοικεν
— *πάντα γὰρ εὖ κατὰ κόσμον—ἐπαρτέα κεῖται ἰοῦσιν.*

この便法は R. C. Seaton (Oxford 1900) 及び G. W. Mooney (Dublin 1912) の採用するところとなった。Seaton はその校訂本に英訳を付してロエブ古典文庫に入れ (London 1912), 次のように訳している。“All the equipment that a ship needs—for all is in due order — lies ready for our departure.” all the equipment が誤訳であることは明白である。*ἄλλα* は正確に訳されなければならないからである。その理由も後で述べる。それはともかくとして、ここでもやはり *πάντα* の意味は判然としないのである。それよりも、古代ギリシャ人は物を書く時句読法や挿入文のための記号を持っていなかったという事実がある。近代以降テキストの校訂者は便宜上これらの記号を使用する。しかしこれを多用することは危険を招くこともあると思う。この場合 *κατὰ κόσμον* が *κεῖται* と共に読まれなければならないのは明白である。尤も *κόσμον* の後にカエスラが在るから切り離すことも可能であるが。*πάντα γὰρ εὖ κατὰ κόσμον* を挿入文と見る場合、定動詞が欠けることも困る。*κεῖται* を2度読むということであろう。しかし何よりも先ず句読法を使わなかった古代ギリシャ人達が Wellauer の期待通りこの部分を独立の文として読んでくれるであろうか。私には信じられないことだ。さて、終に業を煮やした A. Platt は (JPh 66, 1914, p. 6) 332 行を

「……である限りの他の物に関しては」という副詞句とし、一つのまとまりとして解し、*γὰρ* の位置に何ら不都合は無いと説明した。言わば、アポロニオスは下手なギリシャ語を書いたものと突き放したわけである。これは少々乱暴である。

さてここに近年に至って多くの校訂者達の賛同を得ている推定がある。十七世紀の人で P. D. Huet の推定である。彼は *γὰρ* を *μάλ'* と訂正した。見事と言うほかない。この推定には抵抗し難い魅力がある。大胆な校訂者 H. Fränkel (Oxford 1961) 及び適切な読み方を提示して優れた校訂を行なった F. Vian (Paris 1974) もこの推定を採用している。*μάλια* という副詞は形容詞 *πᾶς* と結びついて幾種類かのいわゆる定型句を形成し、ホメロスに頻繁に現われるからである。アポロニオスもこれらを使用する。しかも *πάντα μάλ'* という定型句が詩行の第一脚に置かれる例がホメロスに 8 回ある。アポロニオスでは 4.85 に 1 回現われる。このことが Huet の推定の根拠になっている。実にぴたりと当てはまるのである。更にアポロニオスは 332—333 行の詩句を次に示すホメロスの定型的表現を下敷にして作っているように見える。/*πολλὰ μάλ', ὅσσα ἔοικε* (α278, その他), *πολλὰ μάλ', ὅσσα τε* (λ280), / *ὅσσα τοι*…… / …… / *πάντα μάλ'* (π284—6) などを挙げれば充分であろう。従って、一見してまさしく叙事詩の体を為すのである。優等生の解答である。抵抗し難い。しかし私はどうも違うような気がするのである。これは形態上の問題なのだが、*ΜΑΛ* と *ΓΑΡ* には少し距離がある。おそらく写し手或いは写し手のための読み手は少し後に現われる / *ἀλλὰ, φίλοι, ξενὸς γὰρ κτλ.* (336) という詩行をふと見たのだと思う。そしてこの *ΑΛΛΑ…ΓΑΡ* に引かれて *ΓΑΡ* と書いてしまったのだとも思える。そこで *ΜΑΛ* を *ΓΑΡ* と取り違える可能性がどの程度大きいかという問題になる。しかし程度の問題は客観化しにくいし、人間間違いを犯す時はどのような状況でも間違えるのであるから何とも言いようがない。

ところで、H. Fränkel も *μάλ'* という推定には完全に満足しているわけではないようである。というのは、その校訂本の異読表に “*potest ordo versuum inverti*” と書き入れているからである。つまり、332 行と 333 行を入れ替えてみてはどうかと提案しているのである。この提案は、1.630—3 及び 4.1165—8 に使われる *ἀλλὰ γὰρ*……*τῶ* という構文を根拠にしている。この提案にヒントを得て、というより勇気を得て、A. Ardizzoni は (RFIC 45, 1967, p. 54—55) 詩行をすっかり取り替える必要はない、*γὰρ* と *μὲν* だけを入れ替えば充分である、これによってまさしくアポロニオスの語法に合致する。このように提案するのである。この場合、*ἀλλὰ* を *ἀλλὰ* としなければならぬ。テキストは次のようになる。

*ἀλλὰ γὰρ ὅσσα τε νηὶ ἐφοπλίσασθαι ἔοικε,
πάντα μὲν εὖ κατὰ κόσμον ἐπαρτέα κείται ἰούσιν,
τῶ κτλ.*

なるほど非常にすっきりとする。このようなやり方は、即ち、詩行や言葉の入れ替えは校訂者達が時折使う方法である。成功する場合もあると思う。しかし、テキストが余程の損傷を受けていると判断されない限り非常に危険な方法であると言わねばならない。言わば荒療治だからである。今問題になっているテキストがそれほどの損傷を受けているとは思えないのだ。この荒療治で非常に困ることが一つある。ἄλλαが消えてしまうことである。この ἄλλα は必要なのである。その理由を次に述べる。

冒頭で I の系統の写本の中に γὰρ の代りに δὲ という読み方をしているものがあると述べた。この読み方は一応検討してみる必要があるので、ここから話を進める。δὲ と直された理由は分明ではない。しかし写本家は γὰρ に疑問を持ったのかも知れない。疑問を持ったとするとそれは何か。二通り考えられる。先ず、γὰρ の一般的用法は既に述べられた事柄を根拠づけることである。ところがこのテキストはヤーソンが初めて同輩の前に姿を現わして行なう演説の冒頭にあたる。従って、いきなり「何故ならば」という表現が為されるので γὰρ はおかしいと思ったのかも知れない。第二の理由としては、やはり γὰρ の位置に疑問を抱いたのだと考えられよう。それでは何故 δὲ を選んだのか。これは前行に μὲν があるので μὲν…δὲ という対応関係から単純に δὲ を選んだのだと思う。理由が何であれ δὲ が間違いであることは確かである。というのは、δὲ εὖ という並べ方はギリシャ語として好ましくないからである。δ' εὖ としなければならぬ。ところが δ' εὖ は韻律の点で無理となる。従って δὲ の可能性はない。ところでこの δὲ は一つのヒントを与える。即ち、アポロニオスは δὲ でもなく γὰρ でもなく δ' ἄρ' と書いたのではないかという推測に導く。ΔΑΡ を ΓΑΡ と間違える可能性は充分考えられる。そうするとテキストは次のようになる。

ἄλλα μὲν ὅσσα τε νηὶ ἐφοπλίσασθαι ἔοικε,
πάντα δ' ἄρ' εὖ κατὰ κόσμον ἐπαρτέα κείται ἰούσι.

意味は、「船に装備されるに相応しい限りの他の物は整った、その結果全ての物は出発する我々のために順に適ってすっきり整っている」となる。κείται を ἄλλα と πάντα の両方にかける。このことは μὲν…δὲ という対応によって可能である。ἄρα という小辞は微妙なニュアンスを有する言葉である。或る事柄が起りそこから別の事柄が結果として現われる場合に、特に叙事詩においては演説の中で多用される言葉である。δ' ἄρ' によってすっきりとしたギリシャ語になる。ところが、実はこの δ' ἄρ' はヤーソンの演説の主眼点を台無しにしてしまうのである。ヤーソンの、というよりもアポロニオスがヤーソンに言わせている演説の主旨は何か。それはこの演説の後半の 5 行 (336—340) に述べられている。即ち、諸君はこれから困難な航海に出るのであるから、どのような出来事にも対処出来る「優れた指導者を選んでくれ」(338—9 τὸν ἄριστον… ἔλεσθε / ὄρχαμον ἡμεῖων) という点にある。そうすると、333 行の πάντα には英雄達の航海の指導者、即ち船長は含まれてい

ないことになる。船長が選出されて初めてアルゴ一号に関わる全てが整えられることになるのである。従って ἄλλα は重要な言葉になる。ἄλλα と πάντα を切り離すことは出来ない。ヤーソンは、船に必要な（船長以外の）他の事柄は全て整った、しかし (336 ἄλλα) 航海は困難を極めるであろうから今度は (338 νῦν) 優れた指導者を選ばねばならぬ、と言っているのである。それ故、E. Gerhard の推定も A. Ardizzoni の提案も放棄されなければならない。R. C. Seaton は ἄλλα を正確に訳出しなければならなかったのである。そこで、私は τ' ἄρ' ではないかと考えてみた。TAP と ΓAP は形態上容易に混同される類似点を有する。形から言えば可能性は非常に高い。τ' は言わゆる「叙事詩の τε」である。「諸君も知っているように」というニュアンスを持つ。ἄλλα と πάντα を切り離すことにはならない。ἄρα は訳出しにくい言葉であるが、叙事詩中において演説者が聞き手の注意を喚起する場合にしばしば使われる。意味はすっきりと通る。船に必要な他の全ての事は、御覧の通り、万端整った、云々、となる。しかし、アポロニオスがこのように書いたかどうかということになると、歯切れの悪い話だが、自信が無い。意味は通るがギリシャ語に締りが無いのだ。可能性が有るといふことしか言えないのである。

さて、結論に入るが、ここに名案を出した人がいる。F. Vian である。彼はその校訂本において Huet の μάλ' を採用している。だが、彼も H. Fränkel と同様にこの推定に満足しているわけではない。それなら何故採用したのか。恐らくこの推定を論駁する確固たる証拠が無かったのだとも思われる。μάλ' は余りにもこのテキストに合致するからである。私には少々うまく適合しすぎると思えるのだ。F. Vian が μάλ' に満足していない証拠は、彼が校訂本の異読表に“fort. τάγ'”と書き入れている点にある。γὰρ ではない。さりとて μάλ' でもなく、τάγ' かも知れない、という意味である。つまり、τάγ' について検討して欲しいと言っているのである。これは真に慧眼としか表現のしようがない優れた推定であると私は思う。この推定は、1.1067—8 / καὶ οἱ ἀπὸ βλεφάρων ὅσα δάκρυα χεῖναν ἔραζε, / πάντα τὰ γε κρήνην τεύξαν θεαί, という詩行にヒントを得ている。τάγ' (τάγ' と離して書いても差しつかえない) とするとテキストは次のようになる。

ἄλλα μὲν ὅσσα τε νηὶ ἐφοπλίσασθαι ἔοικε,
πάντα τὰγ' εὖ κατα κόσμον ἐπαρτέα κείται ἰοῦσι
τῶ κτλ.

この場合、指示代名詞 τὰ は上の行の ἄλλα を拾い上げる。γ' (即ち γε) は τὰ を強調する。「少くとも」或いは「とにかくも」の意味をもつ。この τὰγ' によって文全体はピリッと引き締まる。まさしく叙事詩の形を為すのである。直訳すると意味はこのようになる。「船に装備されるに似つかわしい限りの他のこと（について）は、少くともそれらのことは全て（の点で）船出しようとしている我々の為順に適ってきちんと整えられている。それ故に、云々。」この構文の類例はむしろ 3.58—60 に求められるべきである。

Αἰσούιδης ἡδ' ἄλλοι ὅσοι μετὰ κῶας ἔπονται.
 τῶν ἦτοι πάντων μὲν, ἐπεὶ πέλας ἔργου ὄρωρε,
 δείδιμεν ἐκπάγλως,

次に、ホメロスについては次のような類例を示すことが出来る。E 877 / ἄλλοι μὲν γὰρ πάντες, ὅσοι … : ν 11—12 / κεῖται … ἄλλα τε πάντα / δῶρ', ὅσα … : 指示代名詞によって拾い上げる場合は、例えば、K 300—2 πάντας ἀρίστους, / ὅσοι ἔσαν Τρώων ἠγήτορες ἡδὲ μέδοντες. / τοῦς … : δ 719—21 περὶ δὲ δμῳαὶ μινύριξον / πᾶσαι, ὅσαι κατὰ δώματ' ἔσαν νέαι ἡδὲ παλαιαί. / τῆς δ' … : これらが類例の限度である。πάντα τάγ' について考えてみると、類例としては、τάδε πάντα (ρ 601, τ 305), ταῦτά γε πάντα (δ 266, σ 170), / πάντα τάδ' (O 154) などがある。もう少し引き延ばして、/ πάντα τάγ' εἶ κατὰ κόσμον についてはどうか。ホメロスの定型句として ταῦτά γε πάντα, …, κατὰ μοῦραν (A 286 その他) というのがある。最後に、アポロニオスの問題の箇所と非常に似ているホメロスの唯一の例を示す。

ξ 361—3 ἄ δειλὲ ξείνων, ἦ μοι μάλα θυμὸν ὄρινας
ταῦτα ἕκαστα λέγων, ὅσα δὴ πάθες ἡδ' ὄσ' ἀλήθης.
 ἄλλα τά γ' οὐ κατὰ κόσμον δῖομαι, οἷδέ με πείσεις

以上示したホメロスの例をアポロニオスの問題の詩行と比較すると、どことなく似通っている。しかし、どこか異っているのである。ホメロスに似て非なるものがアポロニオスの中に見られる。ホメロスに似て非なるものは何か。実はこれがアポロニオスの真骨頂なのである。アポロニオスをホメロスから明確に区別させる独自のスタイルはまさしくこの点にある。Huet の推定は説得力があるが、何か違うような気がすると述べたが、それはこのことなのだ。TAG と GAP はそう遠くない。私はアポロニオスが TAG と書いたと確信する。